

児童とその保護者の関係に着目した防災教育実施の効果に関する研究

北見工業大学 正会員 ○高橋 清
日本工営株式会社 石田 樹里
北見工業大学大学院 学生会員 三浦 翔平

1. はじめに

東日本大震災以降、学校・保育所における防災教育の実施はきわめて重要視されているが、その教育方法も含め、まだ広く普及されていないのが現状である。特に学校における防災教育は、子供から保護者へ、さらには地域の人々を巻き込むことで、防災意識や防災行動が地域へ拡大していくという点から考えても、今後その重要性は高まると考えられている。

既存の防災教育に関する研究の中で、小館ら³⁾は、防災教育プログラム開発と防災教育推進を目的とし、児童・保護者間での意識の相違を明らかにした。また、目山ら⁴⁾は、学校・家庭・地域を対象とした防災教育プログラムを実践し、PTAを通じた家庭・地域へのアプローチを充実させる必要があるため、防災授業も親子で受けるプログラムなどに改善していく必要があると述べている。

そこで本研究は、児童が防災教育を受けることで保護者の意識に変化が見られるのか、また、小学生から中学生へ成長するに従い、防災に対する意識に違いが見られるのか把握することで、児童や生徒、保護者へどのような防災教育が有効なのかについて考察することを目的とする。

2. アンケート調査の概要

本研究では、防災教育がもたらす防災意識を明らかとするためにアンケート調査を実施した。保護者と児童の関係を分析するため、北海道北見市立小泉小学校 6年生とその保護者を調査対象とした。また、小泉小学校で防災教育を受けた児童がほぼ全員進学する中学校である北見市立小泉中学校 1、2年生を対象に、2015年9月下旬から10月下旬にかけてアンケート調査を実施した。回収票は6年生(96票)保護者(24票)、中学校1、2年生(合計210票)である。調査項目は個人属性の他、防災教育に関する設問から構成される。

3. 「川の防災学習会」の内容

アンケート調査を実施した小泉小学校では、平成20年度より4~6学年を対象として、「川の環境・防災学習会」を実施している。平成25年度からは、6年生へ「川の防災学習会」として、災害図上訓練(DIG)を取り入れた防災教育を

実施している。

「川の防災学習会」の内容は以下のとおりである。最初に水害のイメージを共有する目的で、豪雨の被害状況と特別警報などを、動画や写真等で確認する。その後、各班に配布した地図を用い、自分の住んでいる地域の特徴を確認する。さらに、DIGでは、家族が在宅していないケースを想定し、災害時の判断について各班で話し合う。最後には、各班で出された意見を発表し、災害に対する心構えについてクラスで共有し合う、という順序で実施している。



図-1 「川の防災学習会」の様子

4. アンケート調査結果と考察

4.1 保護者の防災教育に対する意識

防災教育における保護者意識結果分析の一部を図-2、図-3に示す。それぞれ46%と36%が、防災の授業参観や防災行事に参加してみたいと回答しており、授業参観が多くなっている。

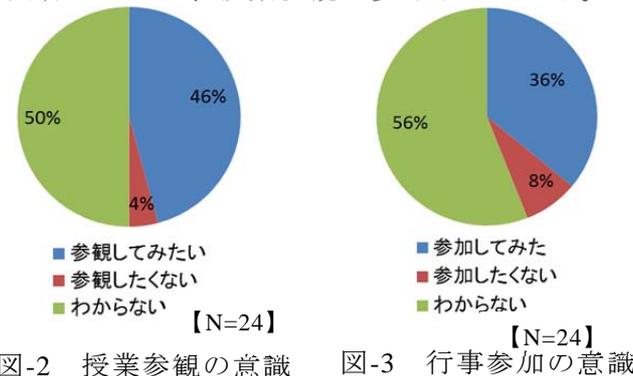


図-2 授業参観の意識 図-3 行事参加の意識

一方、回答者の中には、防災教育を参観してみたいと回答しているが、防災行事へは参加したくない、又はわからないと回答している保護者も見られる。

キーワード 防災教育 意識調査

連絡先 〒090-8507 北海道北見市公園町165 北見工業大学社会環境工学科 TEL 0157-26-9502

このように回答した 保護者にとっては、防災授業の「参観」の方が、防災行事の「参加」より行きやすいと感じていることから、より身近なところから防災に接することが一つの方法であると考えられる。今後、防災への取り組みを容易するアプローチとして、防災教育を「参観」することからはじめ、地域や学校などで実施される防災行事に「参加」するという段階を踏む仕組みの検討が必要である。

4.2 防災教育を受けた児童と保護者の関係

児童と保護者の防災に対する意識・行動の違いについて把握するため、同じ家庭の親と子のペアからなる集団だと仮定できるサンプルデータを用い分析を行った。

図-4は災害について親子間での会話の有無についての分析を行った結果である。図-4に示すとおり、保護者の方が児童より会話があったと回答した割合が高い値となっている。他の設問についても同様に、児童と保護者の回答内容の割合比には違いが見られた。つまり、保護者は児童と防災等に関して話しているつもりであっても、児童はそれを認識していないか、もしくは会話の内容について、ギャップが生じていることが十分考えられる。

児童と保護者との防災に対する会話の機会が存在することは重要であるが、さらにその内容の共有化を図ることが必要である。そのためにも今後の防災教育実施にあたっては、児童と保護者共に会話をとおして考える機会を作り、さらには会話の内容を認識することで、児童と保護者間での意識共有がより効果的に図られる方法を考えることが重要となる。

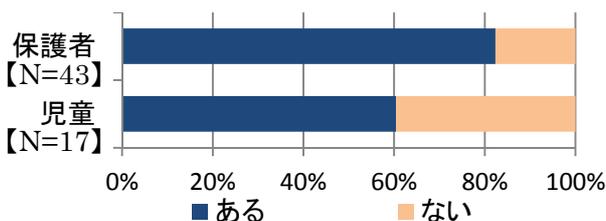


図-4 児童と保護者の災害に対する会話の有無

4.3 小学生と中学生の防災教育に対する意識

小学生と中学生に実施したアンケート調査の自由回答を用い、キーワード分析を行った。自由回答の内容で多く出現したキーワードやその具体的な内容を、表-1と表-2に示す。

児童の最も多かったキーワードは「避難」であった。学習会ではDIGを実施したことにより、避難に関する内容が多かったことが理由の一つと考えられる。また、「とてもよくわかった」という回答も多くみられたことより、児童にとって理解しやすい防災教育の実施が効果的であると考えられる。

生徒の回答で多かったキーワードは「～したい」、「～を知りたい」というワードであり、自分からしたい、知りたいといった自分の意思が感じられるような回答が多くみられた。以上より、生徒の知りたいニーズを事前に把握し、今後の行動に繋がる防災教育メニューを中心とした防災教育が効果的であると考えられる。

自由回答の分析結果より児童と生徒の自由回答内容より防災教育に対する関心の向きが異なることが明らかとなった。今後は考え方や関心の向きに合わせて、防災教育の内容や進め方を検討することが必要であると考えられる。

表-1 児童の多かった自由回答内容とキーワード

キーワード	具体的な内容
避難	<ul style="list-style-type: none"> ● 避難の準備をしておくことが大切だと思った ● 避難所がわかった
わかった	<ul style="list-style-type: none"> ● とてもよくわかった ● 避難のことがよくわかった
ハザードマップ	<ul style="list-style-type: none"> ● ハザードマップ作りが楽しかった ● ハザードマップを見たら危険なところがわかった

表-2 生徒の多かった自由回答内容とキーワード

キーワード	具体的な内容
～してほしい、したい	<ul style="list-style-type: none"> ● 体験できるようなものをしてほしい ● 防災教育の回数を増やしてほしい
防災	<ul style="list-style-type: none"> ● 防災教育の回数を増やしてほしい
～を知りたい	<ul style="list-style-type: none"> ● 災害の時に必要な物を知りたい ● 災害の前兆について知りたい

5. おわりに

本研究では、防災に対し保護者も児童と共に考える機会をつくり、意識の共有が必要であることが明らかとなった。また保護者に対する防災へのアプローチとしては、授業の「参観」から行事の「参加」へと段階を踏むことで、防災への取り組みが容易になることが明らかとなった。さらに児童生徒に対する防災教育は、理解しやすい防災知識の教育から、行動に繋がる防災教育へと、考え方や感じ方に合わせて防災教育を実施していくことが重要であり、今後ともより効果的な防災教育の検討が必要であると考えられる。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力頂いた小泉小学校、小泉中学校の学校関係者の皆様、アンケートに回答していただいた児童・生徒、小泉小学校6年生保護者の皆様に心より感謝いたします。

参考文献

- 1) 小舘亮太、田中岳：児童とその保護者を対象にした防災意識の相違-意識調査を取り入れた防災教育プログラムの実践-、土木学会論文集 F6、Vol.68、No.2、pp.181-186、2012
- 2) 目山直樹、後藤晃徳：防府市華浦・大道地域での防災教育を通じた防災意識の変化 学校・家庭・地域社会と連携した防災教育プログラムの実践と評価その3、土木学会第70回年次学術講演会、CS1-004、2015